群教セ	G01 - 03
	平16.219集

話し言葉によるコミュニケーション能力を高める国語の授業の工夫

――継続的・計画的に行う「話すこと」にかかわる活動を通して――

特別研修員　　大須賀　正樹　（子持村立子持中学校）

《研究の概要》

本研究は、国語の授業において「話すこと」にかかわる活動を継続的・計画的に行うことで､生徒の話し言葉によるコミュニケーション能力を高めることを目指したものである。音読や朗読、スピーチ等の発表活動を継続的に実施しながら、話す速度や会話の仕方等を学ぶ授業を計画的に実施することで、相手や場面、目的に応じて分かりやすく話す力の定着と向上を図ることを目指している。

【キーワード：国語－中　中高一貫教育　コミュニケーション　音声表現】

Ⅰ　主題設定の理由

生徒は、誰もが楽しい学校生活を送りたいと思っており、級友と仲良くなりたい、自分のことをわかってもらいたいという欲求をもっている。このような人間関係を築き、維持していくためには、価値観や考え方の違う相手と気持ちや考えを伝え合って相互理解を深めながら、よりよい人間関係を形成していく能力が必要である。しかし近年、携帯電話やパソコンの普及による間接的なコミュニケーションの増加や、少子高齢化、核家族化に伴う家庭での言語教育力の低下によって、生徒の話し言葉によるコミュニケーション能力が低下していることが文化審議会国語分科会の報告案（「これからの時代に求められる国語力について」2004.2）等でも指摘されている。こうした社会状況の中では、学校において生徒の話し言葉によるコミュニケーション能力を育成するための指導を行うことが今まで以上に重要になる。現行の学習指導要領解説国語編に、小・中・高校を通じた共通の目標として「伝え合う力」という言葉が盛り込まれ、コミュニケーション能力を高めることが重視されたのは、こうした社会状況を踏まえたものであると思われる。

本校においても、自分の考えや気持ちを十分に表現できない生徒が増えていることが課題となっている。職員間では「人前で話すことが苦手な生徒が増えた。」「人と話す時に、文ではなく単語で済ませる生徒が増えた。」といった生徒の実態が挙げられ、今年度から校内研修で「生徒の表現力を高める授業の実践」に取り組み始めたところである。現在担当している一年生も、四月に実施したスピーチの授業において「声が小さい」「早口である」ために発表が聞き取りにくい生徒や、「原稿を棒読みする」「聞き手を見て話せない」ために自分の考えをわかりやすく伝えられない生徒が多く見られた。一方、ＣＲＴ学力検査や、定期テストで実施している聞き取り問題の結果からは、話を聞き取る能力はおおむね満足できる状況であることがわかった。「聞くこと」に比べて「話すこと」における課題が多い原因として、学校生活では生徒が人の話を聞く機会が多く、「話している人を見て聞く」「人が話している時は静かに聞く」といった聞き方の指導が頻繁に行われるのに対して、人前で発表する機会や話す技能を学ぶ機会があまり多くないために、自分の話し方を客観的に振り返る指導があまり行われてこなかったことが考えられる。

そこで本研究では、中学校の三年間で生徒のコミュニケーション能力を高めることを見通して、その基礎にあたる一年生でコミュニケーション能力の基礎の定着と向上を図るために、「話すこと」にかかわる活動を計画的・継続的に実施していく。また、県立中央中等教育学校では総合的な学習の時間のＣＯＭ（コミュニケーション）において、「コミュニケーションのマナー」「伝えたい思いを正しく伝える」を基礎期（１、２年）のテーマとしていることを踏まえ、本校の国語科の実践と比較、検討することにより、国語科の授業改善と生徒の話し言葉によるコミュニケーション能力を高めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

「話すこと」の授業において、話す技能の指導を継続的・計画的に実施し、多面的な評価と個々の課題に応じた指導をすることにより、話し言葉によるコミュニケーション能力が高められることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　毎時間の国語の授業に設定した「発表タイム」において、音読、朗読、スピーチ等の発表活動と多面的な評価を継続的に実施し、話す技能を繰り返し学べば、話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎が定着するであろう。

2　「話すこと」にかかわる学習活動において、話す速度や会話の仕方等を楽しみながら学ぶ活動を計画的に実施し、話す技能を系統的に学べば、話し言葉によるコミュニケーション能力が向上するであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　「話し言葉によるコミュニケーション能力」について

コミュニケーション能力とは「聞く力・話す力・読む力・書く力」の四つを総合した能力であるが、本研究では生徒の実態を踏まえて「話す力」に焦点を当てる。図１に示したように、話し言葉によるコミュニケーションには①言語情報と②非言語情報の二つの経路がある。言語情報とは言葉のやりとりのことである。非言語情報とは話す技能のことで、話す速度、音量、能と、視線、表情、姿勢、身ぶり等の態度にかかわる技能が含まれる。本研究の対象は中学校一年生であるので、話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎となる話す技能を身に付けることが大切であると考える。話す技能は意識的に訓練しない限り、自分自身で高めることは難しいので、本研究では特に話すことに関する基礎的技能の定着を図るとともにさらなる向上を目指して実践を進める。

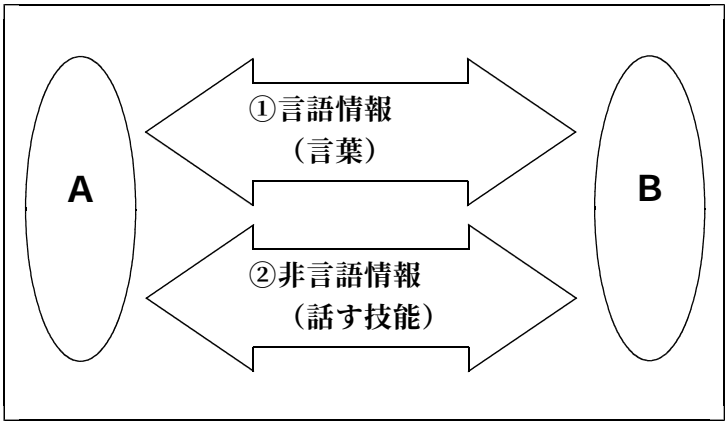


図1　話し言葉によるコミュニケーションの概念図
（前川：1997）

(2)　「継続的に行う活動」について

話す技能が定着するためには、繰り返し学習をすることが必要である。そこで本研究では、国語科の授業に五分間の「発表タイム」を設定し、生徒が話す技能を意識しながら音読や朗読、スピーチ等の発表をする活動を継続的に実施する。さらに、発表に対する多面的な評価と個々の課題に応じた指導を行うことで、話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎が定着することもねらいとしている。一人一分程度の発表を毎時間三人が行うことで、一人の生徒が発表する機会を一ヶ月に一回程度の割合で確保することができる。

(3)　「計画的に行う活動」について

「継続的に行う活動」が話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎力の定着をはかることを目的としているのに対して、話す速度や会話の仕方等を学ぶ「計画的に行う活動」では、さらなるコミュニケーション能力の向上をはかって双方向的活動を中心として相手や場面に応じた応用的活動を一～二ヶ月に二～三時間かけて行う。その際、生徒が楽しみながら取り組める教材を用意するとともに、継続的に行う活動と関連させて実施することで、話し言葉によるコミュニケーション能力が効果的に高められることをねらいとしている。

(4)　「多面的な評価と個々の課題に応じた指導」について

本研究では、生徒が自分の話す技能の状況をより客観的にとらえ、課題を把握、改善していくために、発表に対して自己評価、相互評価、教師による評価を実施する。評価する項目は活動内容によって替え、それぞれの項目を◎、○、△の三段階で評価して評価カードに記入するという方法で実施する。評価の段階を三段階にしたのは、生徒にとって評価活動が負担にならないようにと考えたからである。また、発表者の励みになるよう、×の評価は取り入れないこととした。なお、評価する項目と評価規準は随時生徒に提示し、評価する項目と評価規準を常に確認できるよう配慮した。（評価する項目と評価規準は資料編Ｐ３、評価カードの形式は資料編Ｐ３、４参照）

ア　自己評価

発表に対する自己評価は二回実施する。一回目は発表直後に自分の発表を振り返って評価し、二回目は発表を録音、録画したものを視聴してから評価する。これは、発表直後の評価は生徒によって厳しすぎたり甘すぎたりする傾向が見られるため、自分の発表をできるだけ客観的に評価することで、話す技能の課題を把握、改善しやすくするためである。

イ　相互評価

相互評価カードを見ることで発表者が話す技能の課題を把握、改善しやすいように、相互評価カードにはアドバイスを記入する欄を設けた。また、相互評価をすることで、聞き手の生徒が発表を集中して聞き、級友の話す技能の長所、短所に気付いて自分の話す技能の課題を把握、改善することもできると考えた。

ウ　教師による評価

評価規準が提示してあっても、自己評価や相互評価は生徒の意欲や生徒同士の人間関係に影響されることが多い。そこで教師による評価を実施し、話す技能の課題となる点には改善のための助言を評価カードに記入して発表者に渡すこととした。これによって発表者が話す技能の課題を的確に把握し、改善しやすくなると考えた。

2　研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で授業実践を行い、検証する。

(1)　授業実践計画

期間	平成16年６月～11月
対象	子持村立子持中学校　１年（男子67名　女子60名　計127名）

ア　継続的な活動の指導計画

月	題材	時間	活動内容	評価項目【観点】
6 7	音読	５分 ×11回	・一分間の音読の発表をする。 ・発表の自己評価、相互評価をする。 ・発表の録音を聞き、自己評価をする。	速度、音量 【言語(1)-ア】
9	朗読	５分 ×11回	・一分間の朗読の発表をする。 ・発表の自己評価、相互評価をする。 ・発表の録画を視聴し、自己評価をする。	速度、音量、間 感情 【言語(1)-ア】
11	スピーチ	５分 ×11回	・一分間のスピーチの発表をする。 ・発表の自己評価、相互評価をする。 ・発表の録画を視聴し、自己評価をする。	速度、音量、間 態度、内容 【話す聞く-イ】 【言語(1)-ア】

注：継続的な活動は、毎時間五分間の「発表タイム」を設定して実施する。

イ　計画的な活動の指導計画

月	題材	時間	活動内容	評価項目【観点】
10	話す速度	1	・ラジオ番組を録音した教材や、テレビ番組を録画した教材を視聴する。 ・上記教材の話す速度を比べたり、その原稿を一分間で読んだりする。	速度 【言語(1)-ア】
		1	・教科書教材「新聞少年の歌」の一部（320字程度）を一分間で読む。 ・上記教材を計時しながら読む。	
11	会話	1	・ある場面設定で予想される会話の台本を書き、二人組で会話の練習をする。	速度、音量、間 態度、応答 言葉遣い 【話す聞く-ア】 【言語(1)-ア】
		1	・二人組のうち一人が、前時の場面設定で教師と会話をする。 ・発表の自己評価、相互評価をする。 ・発表の録画の視聴や相互評価で課題を把握し、二人組で会話の練習をする。	
		1	・前時に発表しなかった生徒が、同じ場面設定で教師と会話をする。 ・発表の自己評価、相互評価をする。 ・発表の録画の視聴や相互評価で課題を把握し、二人組で会話の練習をする。 ・希望者が再度教師と会話をする。	

注：・評価項目の評価規準は資料編Ｐ３参照
　　・観点は「中学校学習指導要領　国語編」第１学年の２「内容」による

(2)　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し１	毎時間の国語の授業に設定した「発表タイム」において、音読、朗読、スピーチ等の発表活動と多面的な評価を継続的に実施し、話す技能を繰り返し学ぶことは、話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎の定着に有効であったか。	《活動状況の観察》 ・授業者による授業中の活動の観察 ・録音、録画による発表の様子の分析 《評価カードの分析》 ・自己評価、相互評価における「速度」「音量」「間」の比較による分析 ・評価カードの記述の分析 《アンケート結果の分析》 ・アンケート結果をもとにした意識の変容の分析
見通し２	「話すこと」にかかわる学習活動において、話す速度や会話の仕方等を楽しみながら学ぶ活動を計画的に実施し、話す技能を系統的に学ぶことは、話し言葉によるコミュニケーション能力の向上に有効であったか。	《活動状況の観察》 ・授業者による授業中の活動の観察 ・録画による発表の様子の分析 《評価カードの分析》 ・対話活動の自己評価、相互評価の分析 ・評価カードの記述の分析 《ワークシートの分析》 ・ワークシートの記述の分析 《アンケート結果の分析》 ・アンケート結果をもとにした意識の変容の分析

(3)　抽出生徒

国語の学習に対する関心や意欲、話す技能の定着度、課題となる技能、男女差による変容の違い等を考慮して、以下の四人の生徒を抽出し、活動状況や変容を記録、分析することとした。

A男	課題	・音読や発表の際、適切な間が取れず、早口になる面がある。 ・会話の際、早口になる面がある。
	支援	・発表の録音や録画を視聴し、相互評価を見ることで、間の取り方と話す速度が課題であることを把握し、積極的に改善できるよう支援したい。
B男	課題	・音読や発表の声が小さく、聞き取りにくい。 ・会話の際、とっさの応答ができないことがある。
	支援	・発表の練習をしっかりすることで､自信を持って話せるよう支援したい。 ・相手の話をしっかり聞いて会話をする意識が持てるよう支援したい。
C女	課題	・自分の考えを落ち着いて分かりやすく話すことが苦手である。 ・同年代の相手との会話がぎこちなくなる面がある。
	支援	・言いたいことを整理してから話すことや、相手の反応によって話の内容を変えることを意識し、落ち着いて話すことができるよう支援したい。
D女	課題	・音読や発表、会話の声が小さく、聞き取りにくい。
	支援	・発表の録音、録画を視聴することで、聞き取りやすい音量で話すことの大切さに気付き、音量を改善できるよう支援したい。

Ⅴ　研究の展開

1　題材の考察

(1)　継続的に行う活動

ア　音読

音読は、以前の学習指導要領においては理解領域に位置付けられており、本来は教材を理解するための手段である。しかし本研究では、学級全員の前での発表活動の導入として、音読がふさわしいと考えた。評価する項目は読む速度と音量の二項目とした。また、発表の録音を発表者が聞くことで、自分の話す技能の状況を確認できるようにした。なお、発表に対する意欲が高まるように、自分の好きな本を音読することとした。

イ　朗読（資料編Ｐ４参照）

朗読は、聞き手を前提とした音読と定義されるように、コミュニケーションの機能を含んでいる。そのため、話す技能の定着に適した発表活動であると考えた。評価の項目は読む速度、音量、間の取り方、感情を込めるの四項目とした。音読と同様に発表を録音し、それを発表者が聞くことで、自分の課題を把握しやすいようにした。なお、適切な間を取ったり、感情を込めて読んだりしやすいように、朗読する部分には必ずセリフが入ることとした。

ウ　スピーチ（資料編Ｐ５参照）

話し言葉によるコミュニケーションの様々な形態の中から、生徒が「話すこと」に集中できる形態として、スピーチを実施した。スピーチは、一方的ではあるが、聞き手に自分の考えや気持ちを伝えるというコミュニケーションである。評価の項目は話す速度、音量、間の取り方、話す態度、話の内容の五項目とした。スピーチでは、聞き手に話を聞いてもらえるような話す態度が大切であり、これを身に付けることは対話の際にも役立つと考えたからである。なお、発表の際は、聞き手を見て話す態度を意識できるように、発表原稿ではなく発表メモを用意することとした。

(2)　計画的に行う活動

ア　話し方を学ぶ「話す速度」（資料編Ｐ６参照）

音読、朗読の発表と評価を通して、生徒は自分の話す技能の課題を把握することができた。「話し方を学ぶ」では、コミュニケーションをとるのに適切な速度を学ぶことで、生徒が自分の課題を改善していくことをねらいとしている。なお、教材としてラジオ番組を録音したものやテレビ番組を録画したものを使用し、生徒が楽しみながら取り組めるように工夫した。

イ　話し方を学ぶ「会話」（資料編Ｐ７～10参照）

ここで言う「会話」とは、ある場面設定において教師が相手役となって生徒と一対一で話をする活動である。厳密には「対話」であるが、生徒にとって身近な「会話」という言葉を使用した。評価項目は、話す速度、音量、間の取り方、話す態度、言葉遣い、応答の六項目とし、相手に応じた言葉遣いで、相手の話をよく聞いて応答する技能の定着をねらいとした。実施にあたっては、ねらいとする技能を意識しやすいように、会話の台本を作り、二人組で練習をしてから発表をすることとした。

Ⅵ　研究の結果と考察

1　毎時間の国語の授業に設定した「発表タイム」において、音読、朗読、スピーチ等の発表活動と多面的な評価を継続的に実施し、話す技能を繰り返し学ぶことは、話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎の定着に有効であったか。

(1)　抽出生徒の変容

【Ａ男】

Ａ男の課題は、音読や発表の際に適切な間が取れず、早口になる面が見られることである。Ａ男は「発表タイム」に対して、ねらいをしっかり理解して積極的に取り組む姿が見られた。話す速度は、朗読もスピーチもおおむね満足できる状況であり、落ち着いて聞き取りやすい速さで発表をすることができた。また、朗読の録音を聞いたことで間の取り方が課題であることに気付き（資料２）、スピーチでは間の取り方が十分満足できる状況になった。相互評価や教師による評価を見たり、発表の録音を聞いたりしたことで、適切な間を取らずに話してしまうという課題に気付くことができ、それを意識して発表をすることで課題を改善することができたと考えられる。

資料1　Ａ男の発表に対する評価

教師の評価	速度	音量	間
朗読	○	◎	○
スピーチ	○	◎	◎

資料2　Ａ男の自己評価カード（朗読・二回目）

【自己評価カード】

速度	音量	間	正確さ	感情				
○	○	○	◎	△				

感想・反省　感情を込めて間をあけて読むと良かったです。

※一回目は発表直後、二回目は録音録画視聴後

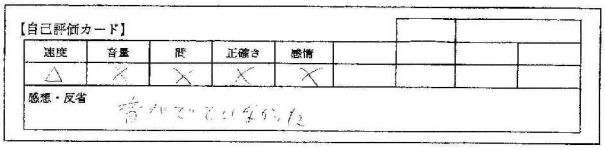
【Ｂ男】

Ｂ男の課題は、音読や発表の声が小さく、聞き取りにくいことである。朗読の発表においてＢ男は、練習をせずに発表したためにしっかり読むことができず、声が小さくて聞き取りにくい状況であった。しかし、発表の録音を聞いて声の小ささに気付けた（資料４）ことと、練習の大切さについて助言を受けたことで、スピーチでは事前に練習をし、音量を意識して発表をすることができた。そのため、自信を持って発表することができ、朗読に比べて大きな声で発表をすることができた。しかし、発表メモを準備しなかったために、覚えたことを忘れないように早口で一気に話してしまい、速度と間の取り方は努力を要する状況であった。

資料3　Ｂ男の発表に対する評価

教師の評価	速度	音量	間
朗読	○	△	△
スピーチ	△	○	△

資料4　Ｂ男の自己評価カード（朗読・二回目）


【自己評価カード】

速度	音量	間	正確さ	感情				
△	×	×	×	×				

感想・反省　音が小さいと分かった

【Ｃ女】

Ｃ女の課題は、自分の考えを落ち着いて分かりやすく話すことを苦手としていることである。言いたいことがうまくまとまらずに言い直す面が見られる。「発表タイム」では、発表の録音を熱心に聞いて課題を見つけようとする姿が見られた。そして、スピーチでは選んだ漢字の提示方法を工夫したり、表情や態度を意識したりしながら発表をし、自分の言いたいことを相手に分かりやすく伝えようとする姿が見られた。Ｃ女は、相互

評価を見たり発表の録音を聞いたりしたことで課題意識を持ってスピーチに取り組むことができ（資料６）、その結果、自分の考えを相手に分かりやすく伝えるための工夫をしたり、話し方を改善したりすることができたと考えられる。

資料5　C女の発表に対する評価

教師の評価	速度	音量	間
朗読	◎	◎	○
スピーチ	◎	◎	○

資料6　C女の自己評価カード（スピーチ・一回目）

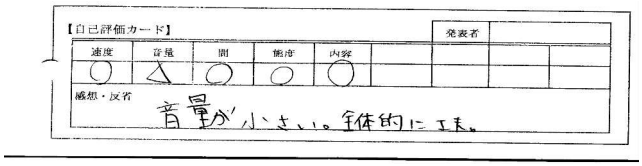
【D女】

D女の課題は、音読や発表の声が小さく、聞き取りにくいことである。D女は朗読にもスピーチにも真面目に取り組んでいたが、音量は努力を要する状況であった。声の小ささが課題であることは自分でも把握している（資料８）が、発表の際にその課題を改善することはできなかった。相互評価や教師の評価を見たり、発表の録音を聞いたりすることで、自分の話し方の課題を把握することはできたが、人前で発表することに対して「恥ずかしい」という意識が強く、「発表タイム」ではその意識を取り除くことができなかった。

資料7　D女の発表に対する評価

教師の評価	速度	音量	間
朗読	◎	△	△
スピーチ	○	△	○

資料8　D女の自己評価カード（スピーチ・二回目）



(2)　学級の変容

図１、図２は「朗読」と「スピーチ」の、教師による評価の割合を表したグラフである。４組ではすべての項目において△の評価の生徒がいなくなり、◎の評価の割合が増加している。一方、３組では音量が△の生徒がスピーチの際にも６％（２名）いた。また、◎の評価の割合にもあまり変化が見られない。４組は発表の後に感想を言う生徒や評価カードに前向きな助言を書く生徒が多く、受容的な雰囲気で「発表タイム」を実施することができた。３組は評価カードに批判的な言葉が書かれたり、スピーチの発表に工夫が見られないなど、前向きな雰囲気が作れなかった。この結果は、話し言葉によるコミュニケーション能力の向上には集団の雰囲気が重要な要素になるということを裏付けるものである。

図1　教師による評価の比較（4組）

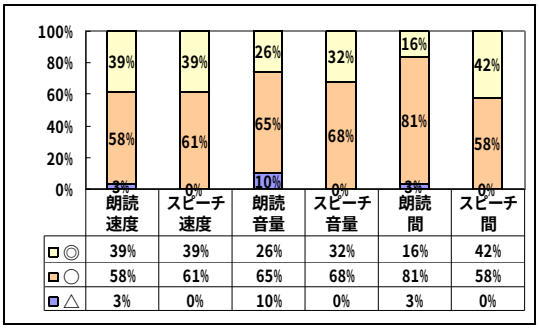
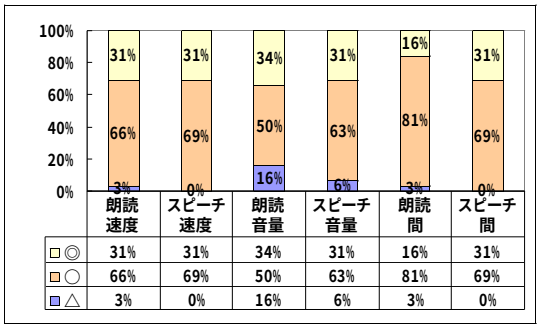


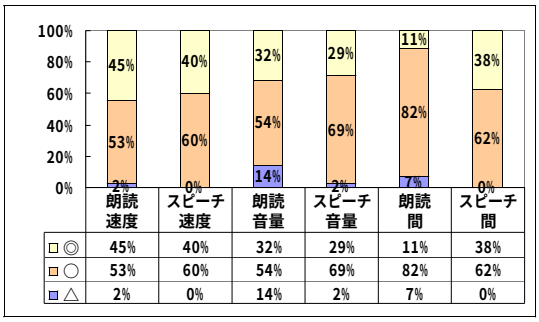
図2　教師による評価の比較（3組）



(3)　学年全体の変容

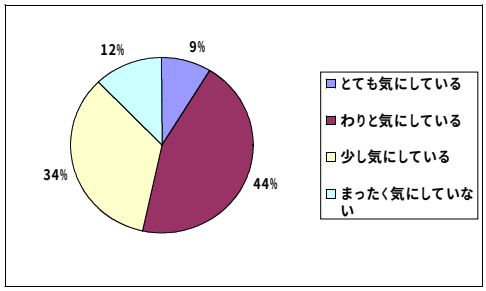
発表タイムを継続的に実施することで、生徒の話す技能に向上が見られた。これは「朗読」と「スピーチ」の、教師による評価の割合を表したグラフ（図３）において、△の評価の生徒の割合が各項目とも減少したことで裏付けられる。さらに、12月に実施したアンケートの結果（図４）では、以前よりも話す技能に対する意識が高まった生徒が全体の約８割に上るという結果が出ている。今後も発表活動を継続することで、さらに話す技能が向上することが期待される。

図３　教師による評価の比較（学年）



	朗読速度	スピーチ速度	朗読音量	スピーチ音量	朗読間	スピーチ間
◎	45%	40%	32%	29%	11%	38%
○	53%	60%	54%	69%	82%	62%
△	2%	0%	14%	2%	7%	0%

図４　アンケート結果
「以前と比べて、話す技能を」



(1)～(3)の結果から、音読、朗読、スピーチ等の発表活動を継続的に実施して言語技術を繰り返し学び、発表を録音、録画して視聴したり自己評価、相互評価、教師による評価を実施したりして多面的な評価と指導をすることは、話し言葉によるコミュニケーション能力の基礎の定着に有効であったと考えられる。

２　「話すこと」にかかわる学習活動において、話す速度や会話の仕方等を楽しみながら学ぶ活動を計画的に実施し、話す技能を系統的に学ぶことは、話し言葉によるコミュニケーション能力の向上に有効であったか。

(1)　抽出生徒の変容

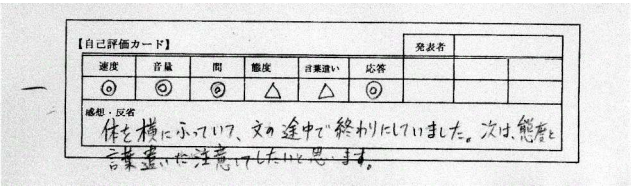
【Ａ男】

Ａ男の課題は、会話の際、早口になることである。Ａ男は話す速度の授業に意欲的に取り組み、話す時の適切な速さを理解し、身に付けることができた。また、会話の授業では速度、間の取り方ともに十分満足できる状況で会話をすることができた。会話の発表の録画を見た後の自己評価では、体を揺すって話す癖があるという新たな課題を見つけることもできた（資料２）。Ａ男は、話す速度を学んだことや、会話の台本作りと練習を通して会話の流れをつかんだことで、自分の言いたいことを落ち着いて話したり、相手の言うことを最後まで聞いたりする気持ちの余裕を持つことができ、適切な速さで話すことができたと考えられる。

資料１　Ａ男の発表に対する評価

教師の評価	速度	音量	間
会話	◎	◎	◎

資料２　Ａ男の自己評価カード（会話・二回目）


【自己評価カード】

速度	音量	間	態度	言葉遣い	応答	発表者		
◎	◎	◎	△	△	◎			

感想・反省
体を横にふっていて、文の途中で終わりにしていました。次は態度と言葉遣いに注意したいと思います。

【B男】

B男の課題は、会話の際、とっさの応答ができず、言葉につまってしまうことである。会話の授業では、事前に作った台本を覚えられたために台本通りに会話が進んでいる間はしっかりと応答ができていた。しかし、台本にない会話になると応答ができず、言葉につまってしまった。事前に会話の練習をしたことや、先輩との会話という日常経験している設定であったことで、ある程度自信を持って会話をすることができたと考えられる。とっさの応答ができるようになるには、相手の話を落ち着いて聞くことが大切であると考えて発表後に助言をしたが、これは短期間で身に付く能力ではないため、継続的な指導が必要であると考えられる。

もっとちょっとうまくいえるようにしたい

資料3　B男の感想（会話）

【C女】

C女の課題は、年上の相手との会話や改まった場面での会話ではしっかりとした言葉遣いで会話をすることができるのであるが、同年代の相手との会話になるとぎこちなくなってしまうことである。会話の授業では、落ち着いてよどみなく会話をすることができたが、これはC女の取り組んだ場面設定が「お年寄りとの会話」であったため、いつも通り落ち着いて話せたものと考えられる。今後も、「発表タイム」で見られたように、自分の言いたいことを相手に分かりやすく伝えることを意識して会話をすることで改善が見られると考えられる。

資料4　C女のアンケートの記述
「話す時に心がけていること」

人に分かりやすいようにきちんとした態度で話せるようにしたいです。

【D女】

D女の課題は、会話の声が小さく、聞き取りにくいことである。会話の授業では音量が若干向上したが、まだようやく聞き取れるという状況であった。D女は人前で発表や会話をすることを「恥ずかしい」と感じる意識が強いが、その原因の一つは資料５に見られるように、会話をしていてどう言い返せばよいか不安に思っていることが考えられる。会話の授業では台本作りや会話の練習を通して応答に自信を持つことができたため、発表の声が若干ではあるが大きくなったと考えられる。

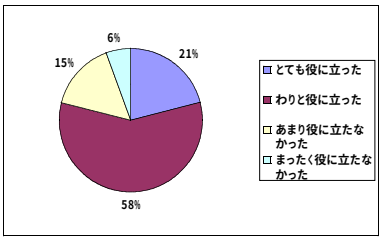
いろいろな場面のときに、いい返す言葉がちゃんとあったらいいなあと思った。

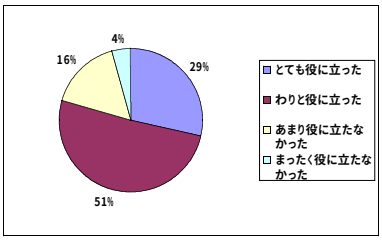
資料5　D女の感想（会話）

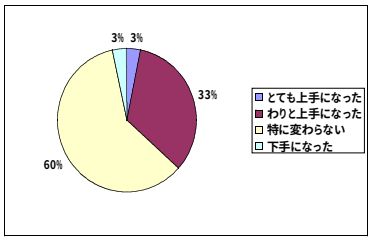
(2)　学年による変容の結果

ラジオ番組やテレビ番組を教材として使用したり、演劇の要素を取り入れた会話の授業を実施したりすることで、生徒の話す技能に対する興味や関心はいつも以上に高まった。資料６は12月に実施したアンケートの結果であるが、計画的に実施した「話す速度」の授業と「会話」の授業を肯定的にとらえている生徒の割合が、どちらも約８割に上る。自分の話し方が上手になったという実感を持つことができた生徒は約４割と少ないが、今後もこうした実践を継続していくことで、より多くの生徒が話す技能の向上を実感することができるよう、工夫をしていきたい。

資料6　アンケート結果（左　「話す速度」の授業：中　「会話」の授業：右　自分の話し方）







(1)(2)の結果から、「話すこと」にかかわる学習活動において、話す速度や会話の仕方等を楽しみながら学ぶ活動を計画的に実施し、話す技能を系統的に学ぶことは、話し言葉によるコミュニケーション能力を高めるのに有効であったと考えることができる。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

(1)　音読や朗読、スピーチ等の発表活動と、自己評価や相互評価、教師による評価等の多面的な評価活動を継続的に実施したことで、生徒は自分の話す技能の課題を把握し、改善して話すことができるようになったと言える。

(2)　話す速度の授業でテレビ番組等を使用して適切な速さで話す体験をしたことや、会話の授業で相手や場面に応じて話す体験をしたことで、生徒は話す技能を身に付け、相手や場面、目的に応じて分かりやすく話すことができるようになったと言える。

2　今後の課題

(1)　音量が小さい生徒の中に、技能がほとんど向上しなかった生徒がいる。こうした生徒の多くは、人前での発表が恥ずかしいという意識が強い。技術的な指導だけでなく、他者と積極的にコミュニケーションを取ろうとする気持ちを育てる指導の研究が必要である。

(2)　本実践では「話す速度」と「会話」を扱った。今後も「間の取り方」「話す態度」等、話す技能の指導にかかわる教材の開発と、効果的な指導計画を作成する必要がある。

(3)　評価規準を作成して生徒に提示したが、項目によっては抽象的な規準になってしまい、評価にばらつきが見られた。より具体的な評価規準を作成する必要がある。

(4)　継続的な活動では、発表と評価の時間以外に、発表を録音、録画したものを視聴する時間や評価カードを回収して発表者に渡す時間も必要である。また、発表の機会が月に一回程度では効率が悪い。発表活動の内容や方法について再度検討する必要がある。

〈参考文献〉

・教育文化研究会　編　『力のつく音声言語学習50のアイディア』　三省堂（1996）
・花田　修一　著　『「伝え合う力」とは何か』　三省堂（1999）
・群馬県教育研究所連盟　編著　『実践的研究のすすめ方』　東洋館出版社（2001）
・村松　賢一　著　『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』　明治図書（2001）